

電子情報文化はこのままでよいのか  
—ある素人からの批判的提言—

2013年11月

佐々木 建



# 目次

はじめに	・・・・・・・・・・・・・・・・	1
I 紙による出版のエコロジー的限界は見え ている	・・・・・・・・・・・・・・・・	4
II 電子書籍はこのままでは人類の文化向上 させない	・・・・・・・・・・・・・・・・	9
III 電子的統制による全体主義に抗して	・・・・・・・・・・・・・・・・	20
おわりに	・・・・・・・・・・・・・・・・	26



## はじめに

---

この8月、これまでに書いた仕事の一部に手を入れて電子書籍として刊行した。いざ意気込んで取り組んでみると、この制度についての疑問が次々とわいてくる。

死ぬまで自由に学び、自由に書きたいと願ってきた。今、学びの成果を電子的に発表できる自由にこれまでにない充足感と喜びを感じている。学びの営みを紙の「書籍」として出版することなどもうどうでも良いと考えていた。制作費用の一部を負担しない限り出版はほとんど不可能だし、負担しても刷部数はせいぜい数百部どまり、ほとんど人の目に触れずに終わる。取次制度、再販価格というこの国の出版文化の悪弊に抗して紙の本を出版すること、私よりもはるかに若い編集者に本の趣旨や販売促進の方法を説明することなど、貴重な時間と労力を費やしてそんな煩わしいことをしてまで、紙の本の出版にこだわることはとつくにやめた。そして、一転して「電子書籍」出版を思ったつたのである。

この心変わりに対する私の態度は明快だ。電子情報化して書いた文章は、いうならば、左翼運動に加わっていた学生の頃に

大学構内やストライキの現場でばらまいていたアジビラのようなものだ。受け取ったほとんどの人はその場で捨ててしまう。一人でも受け取って読んでくれる人がいたら、それがいかに稚拙な文章であろうと、それがいかに汚い謄写版刷りであろうと、ビラを書いたものにとっては、そしてそれを配ったものにとっては満足なのだ。私はいま、学生時代のこの気持ちを思い出しながら、自分の今の仕事もそのようなもので良いと思いながら学びを続けている。

ビラはどこにも保存されない。それと同じように、私の書き散らす文章もどこにも残らない。残らなくても良いと思っている。紙の書物ならこの国では法律によって国会図書館に献本が義務づけられているが、電子書籍についてはそのような制度はない。ウェブサイトやブログとなると、現状では保存されないことを当然として、自己満足のために書き散らしているようなものだ。

このつたない私の仕事の運命はともかくとして、IT 技術によって急速に拡大する文化がこのままの状態でのいのだろうか。今のままでは、現代文化の最重要部分が後世に伝えられないことになりはしないか。紙による出版はその歴史的役割を終えつつあるのではないだろうか。次々と疑問さえわき上がってくる。この国の出版事情の特異さも浮かび上がる。この国では、紙による出版文化が萎え始めているだけではない。電子文化そのものも後世に伝える体制が整備されないまま水準が低下し、文化的後進国になりつつあるのではないか。

電子書籍の刊行に踏み切ってみて、IT 革命がもたらしつつある社会経済的結果についての私の関心はこれまで以上に高まった。私のブログ (<http://www.focusglobal.org>) に、この問題について思いつくままに書き連ねた文章に手を入れまとめてみた。あまりに非論理的な素人の議論であることは承知している。しかしそれは必ずしも私の頭脳の明晰さの程度が反映してのことではない、あまりに急速に展開する電子情報文化の混沌包帯がそうさせているのだと理解してほしい。

# I

## 紙による出版のエコロジー的限界は見えている

---

紙による出版は、技術的、エコロジー的にみるとその限界はきざし始めている。

年代記や思想を書き記し保存する方法は有史以来さまざまな地域でさまざまな形で進化してきたが、紀元前に中国で発明された紙はその最もすぐれた方法として世界中に伝播した。グーテンベルクの印刷機の発明によってその利用は飛躍的に普及した。グーテンベルクが切り開いた紙の大量消費の時代は資源浪費ともいえるほどに出版活動を拡大させ、同時にその拡大に伴って水準が低下する時代を生み出した。紙の出版は今大きな曲がり角に立っている。

### 【想像を超えた酸性紙の劣化】

紙の書籍の保存をめぐる事態は深刻だ。出版の浪費的な発展を可能にしたのは工業生産に適した酸性紙の普及であった。いまその劣化が進んでいる。図書館の書庫に収蔵されているから



書物は永久に残るはずと安心していたら、とんでもないことになる。放置すればすべてが塵になってしまう。紙は茶色に焼け、ページを繰ると簡単に折れてしまうような保存状態の書籍は増えるばかりで、このままでは紙を媒体にした文化は後世に残らない。すべての蔵書のデジタル化が緊急の課題となっている。

書物だけではない。マイクロフィルムに保存されている新聞や資料などもフィルムの劣化で危機に瀕している。映像文化の保存も同じである。戦前の映画はおろか戦後のものでも上映に適さない状態になっている。

国会図書館をはじめとして大きな公共図書館は書物のデジタル化に懸命だが、はたして劣化の速度に追いつけるのか疑問である。大学図書館ではまったく展望が見えていない。学会誌等の定期刊行物のデジタル化はようやく始まったばかりである。問題はバックナンバーの紙質の劣化で、そのデジタル化はほとんど手がつけられていない。研究成果を社会に公表するのは大学の社会的責任であるあるなら、この遅れはいったいどう評価したらよいのだろうか。

#### 【デジタル化の現状と問題】

アメリカがデジタル化や電子情報の保存で最先端を走っていることは言うまでもないが、世界中をみまわすとそれ以外にも多くの先進例がある。例えばユネスコの支援を得てエジプトのアレクサンドリア市に建設されたアレクサンドリア図書館は、かつて古代地中海世界における同名の図書館の歴史的位置を思

い起こさせるかのように、デジタル化の世界的センターとして活動を開始している。いまや紙の出版文化の成果をデジタル化し、地球大的な保存と利用のネットワークを構築する事業が開始されている。

紙とフィルムによる現代文化の記録をそのまま後世に残すことは、この国では絶望的なまでに困難である。土建資本を潤すに過ぎない道路やビルを作るよりも、このような文化的事業に積極的に財政支出してもらいたいものだ。雇用を生み出すことは確実だし、そのノウハウで ODA も充実するのではないか。

紙の書物のデジタル化は死蔵にも近い古い資料を世に出す機会を広げてくれるという利点がある。どこに住んでいてもコンピュータさえあれば閲覧でき、昔のように資料探しのためにわざわざ東京に出かける必要もなくなる。結構なことだ。私は今、明治初期の北海道殖民政策に関する資料の収集をはじめているが、デジタルライブラリーのおかげで収集のための時間も労力も大幅に減り、しかも研究の視野も広がっている。

しかしよく考えてみると、デジタルライブラリーにアクセスできる条件には明らかな格差がある。誰でもアクセスできるという点では確かに平等になったように見える。地方にいても誰でもアクセスして読めるし、自分のプリンタを使ってコピーもできる。ところが現状では、必要な端末が十分に普及し、インフラストラクチャとして図書館等の公共施設に整備されているとは到底いいがたい。一番の問題は、国の次元での統一したデータベースもネットワークも構築されておらず、現状では収

蔵されていそうな図書館のホームページをこまめに覗き回るし  
かないのである。十分な財政的手当によってデジタル化への流  
れが加速することを望みたい。

### 【紙パルプ資源には限りがある】

紙による出版はエコロジ的限界に近づいている。

地球的な視野で見ると、紙による出版活動はいくつかの先進  
国に集中している。地球上に存在する国々の圧倒的部分では、  
書籍出版だけでなく出版全体にわたって貧しい状態にある。教  
育に必要な教科書さえ十分に行きわたらない状態にある国も多  
い。

地球上のすべての国と地域で先進国並みの出版が実現すると  
仮定したとき、そのために必要なパルプを提供するのに十分な  
針葉樹林など北半球には存在しない。限られた資源を分かち合  
うためには、先進国で紙のリサイクル率を高めるか、表現方法  
の多様化で紙の消費の節約を追求する以外にない。率直に言っ  
て、雑誌や新聞、漫画やライトノベル等の読み捨て、売れずに  
版元に返され破却される膨大な出版物の山、これらを規制する  
のは出版の自由に関わる問題であるとはいいいながら、実質的  
には森林資源の浪費ではないだろうか。

出版だけに紙の浪費の責任があるわけではない。紙おむつ  
のような衛生用品、事務用紙の浪費の方がはるかに罪が重いこ  
とは言うまでもない。しかし出版も重要な部分を占めているこ  
は無視できないであろう。グーテンベルクが切り開いた紙の大

量消費の文化は、出版の自由という目の下に無制約の資源浪費をもたらしているのだ。

#### 【電子出版の歴史的役割】

このように考えてみると、電子出版はこの限界を克服する手段、あるいは資源浪費を抑える役割を持っているかもしれない。もちろん端末やコンピュータが安価に提供され、全国统一データベースとネットワークが誰にでもどこからでも自由に利用できるようになった上での話ではあるが。

## II

# 電子書籍はこのままでは人類 文化を向上させない

---

「電子書籍」という表現は進行中の変化を表現する用語としては適切ではない。「電子書籍」と、それ以外の出版活動を包括する「電子出版」とを区別して使うことが必要だ。電子化が進んでいる出版分野には、書物だけではなく新聞、雑誌、商品カタログ等も含まれているからだ。

エコロジ的な視点でみると、読み捨ての出版物は電子化された方がよい。規制によって電子化の方向に誘導するのは明らかに憲法違反であろう。出版社、新聞社と読み手の良識に従ってその方向に向かうのが望ましい。妙な言い方だが、若者のスマホの利用ぶりを見ていると、彼らのおかげでこの流れはすでに始まっているようにも見える。

定期刊行物について言うと、今では外国の新聞記事や論調の主要な部分はネット配信によって簡単にリアルタイムで読める。新聞や雑誌を航空便で取り寄せることなどもう必要ない。新聞の電子版の内容が充実すれば、この傾向はますます強まる

に違いない。

電子出版が問題視されるのは、それ以外の紙の出版物、本来の意味での書物の将来についてであろう。私が以下で議論するのも、この本来の意味での書物の電子化の是非についてとなる。

### 【電子書籍と紙の書籍のすみ分けは可能】

電子書籍の技術はまだ未成熟である。読書の時にはいつも書き込みをし、印象深い部分や重要と思われる部分に傍線を引く。本を汚すことを嫌う愛書家なら、その部分をノートに書き写す。現在の電子書籍の技術水準ではこれらのことをまだできないでいる。できるのはせいぜいのところ付箋を貼ることぐらいだろう。

だから私自身を例にとると、時代小説、推理小説、ハードボイルド等のジャンル、いうならば文庫本に相当する書物は電子書籍で読み、精読を必要とするものは紙の書籍によっている。ジャンルによる読書のすみ分けは、いまのところうまくいっている。私のような使い分けを実行している人は多いのではないだろうか。

このようなすみ分けは、書き手の側でも自覚されてよいのではないか。少なくとも私は長大で精緻な分析の仕事を電子書籍で刊行するつもりはない。この文章の冒頭で、自分の仕事をピラのようなものとしたのは、そのような意味も込めてのことである。

だから、電子書籍が紙の書籍を圧迫するという主張は当たらないと思う。このすみ分けを前提に紙の書籍出版の水準をさらに向上させるように努めたらよいのだ。紙の出版が、そして同時に流通もハウツーものや読み捨て書物に傾斜するなら話は別で、その流れを放置すれば紙の出版は確実に衰微する。紙の出版の衰退は決して電子出版のせいではないのだ。

### 【新しい文化と民主主義のめばえ】

電子書籍の刊行や購入は誰にでも無制約で平等な機会を提供しているように見える。電子書籍の書き手にとっては、紙による出版文化の制約を簡単に乗り越えられ、誰でも自由に発信できる。さまざまな宣言や主張を簡潔に表現できるとすれば、この形の自由は新しい文化と民主主義への可能性をはらんでいるのではないか。その点をよく議論して、それを育てることが重要な課題になっていると思う。

ところが、この国では多くの書き手や書物好きはこの問題に無関心をよそおっている。なかには電子文化を自分の版權を侵害するものとして敵対視する人さえいる。「炊事」などという度の過ぎた電子出版が横行していることも確かだが、これらの問題は制度と法律の整備すれば解決する性格のものであって、電子書籍を出版文化の破壊者として否定的に捉える論拠にはならない。

装丁に至るまでなめるように書物を愛し、本の作りにまでこだわる人々がいる。その人たちに、本来的な書籍出版の衰退は

電子書籍のせいではないことを知ってほしい。若者の書物離れは電子出版の普及するはるか前から始まっていたし、公共図書館の危機が叫ばれ出した時期も電子化の時期と関係ない。電子化の是非を問う前に、紙の出版の衰退の原因を究明してほしいものだ。

### 【このままでは出版の水準が低下する】

少々極端な言い方をすれば、この国では電子文化は若者たちのお遊びの文化であるかのように理解し軽視する傾向が強い。確かに現実はそのように進んでいるように見える。このまま進めば、読書のすみ分けは、スマホに象徴される若者文化に対応した電子出版と、紙の書籍出版への二極化が進むことになる。

それだけでない。そのように進めば、若者文化に迎合するかのような今の電子出版の水準は確実に低下する。そして、若者の書物離れがさらに進んで、紙の書籍出版もさらに衰退するに違いない。先日、この国の学生の学力低下の例証として、学生の年間読書冊数の日米比較の数字が紹介されていた。その差は絶望的なまでに大きい。これではグローバル時代にふさわしい人材の養成策として論じられている改革などまったく意味がない。どうやって本を読ませるか、どうやって読ませるに値する本を作るかを真剣に議論しなければならない時期に来ている。

### 【電子化による文化・社会構造の変貌】

多国籍企業によって操作され、国家権力によって監視される



文化構造が行き着く先は、何の抵抗にも遭わずに進むとすれば  
すでに見えている。憲法的権利に依拠した文化に発展させるに  
はどうしたらよいのか。真剣に考え議論すべき時ではないか。

それはたんなる出版文化のあり方をめぐる問題を超えて、社  
会構造のあり方に通じる重要な問題を提起しているのではない  
か。図式化していえば、電子化を契機に劣化する文化構造の中  
で飼い慣らされた人間像を基礎に全体主義に突き進む道と、多  
様な個性を尊重する民主主義的發展の道のどちらかをとるのかと  
いう課題として突きつけられていある。

#### 【「出版の自由」「表現の自由」はまもられているか】

この国の紙による出版文化を観察してみると、憲法第 21 条  
で「出版の自由」「表現の自由」が保障されているにもかかわらず、この自由は実質的には大きく制限されている。取次制度  
と大手出版社の癒着によって流通過程が独占され、中小出版社  
の販売活動は制約されている。出版活動の東京一局集中によつ  
て地方の出版文化は衰退し、本来ならもっと豊かに賑々しく展  
開されるはずの出版活動の活力は衰弱するばかりだ。しかも支  
配的な潮流に対して批判的な論調を自粛する態度が強まり、批  
判的な論者に対する差別も強まっている。いったいどこに「自  
由」があるというのか。閉塞状況は広まり強まるばかりだ。

電子出版市場の流通過程の独占はさらに極端で、しかもいび  
つである。書籍通販を独占する多国籍企業の支配は強固になつ  
ている。この国の紙の出版文化を独占してきた大手出版社は、

紙の出版の国内市場での支配は維持されているし、今後もそれが続くはずとして、電子情報・出版文化の拡大、電子書籍市場の誕生という歴史的転換の意義を重視してこなかったように思う。ところが、最近では一転して慌てふためき、取り組みの遅れを挽回しようと必死になっている。しかしやっていることの最大の狙いは紙の出版市場の支配を守り切ることではないか。これではまったく後ろ向きの態度と言わざるを得ない。

#### 【電子書籍は端末を買える人しか利用できない】

電子書籍出版はさまざまな格差の現実直面している。購入する側について考えてみよう。コンピュータやタブレット端末は高価で誰にでも買えるというものではない。だから高価な端末機器を購入できる人に限って利用できるシステムである。しかも、基本的にはクレジットカードを使用できる人しか書籍を購入できない仕組みになっている。高齢者にいたってはほとんどは操作に習熟していない。紙の書籍であれば、自分で買わなくとも、図書館を利用すればこの格差や不平等はある程度まで解決できるのに。すぐ後で論じるように、そこにも大きな問題が隠されている。

#### 【質の高い電子出版を実現しよう】

紙による出版文化は維持しなければならないことはいうまでもない。その場合、その水準の向上がつねに目指されなければならず、憲法の規定に従って出版と表現の自由が保障されると

いう条件付きである。電子出版がすでに定着している以上、その水準を向上させ、これとのすみ分けと共存のあり方を模索することも重要な課題である。そのためには、なによりもまず紙による出版文化に対して保障される権利が電子書籍にも与えられなければならない。

大手出版社の支配する構造が出版文化の水準を低下させているとすれば、書き手と中小出版社が協力して質の高い書籍を出版するシステムを作るべきだと思う。電子書籍は多国籍企業や大手出版社の支配に抗して独自の自由な活動領域を展開する可能性があるのだから。このような自由な活動領域を求める動きは少しずつではあるが始まっているようだ。

青空文庫というウェブサイトがある。著作権がきれた書物を電子書籍化して無料で提供するボランティア組織によって運営されるサイトで、古典的な作品、しかも大手出版社が採算性を理由に出版しない作品を無料で提供している。ここにも電子書籍の持つ大きな可能性を感じる。

夏目漱石の『我が輩は猫である』は岩波文庫電子書籍版では693円なのに、青空文庫では無料で読める。紙の出版を維持したい岩波書店と版權が切れた古典を誰でも読める形で提供したいという青空文庫の姿勢がこの価格差に示されている。文庫本で読みたいという人も多いわけだから、両者が共存するのはそれ自体としては結構なことだ。しかしそれほど紙の文庫にこだわるのなら、損得抜きで古典的作品をどんどん収録してほしいものだ。酸性紙で劣化した古書の中から読みたい本を探し出す

ことは、専門家はともかく、学生や普通の読書人にはとてもできないことなのだから。

電子書籍の価格の決め方にも問題がある。紙や印刷、製本のコストがかからないだけでなく、取次と小売店に配分される利益の分も価格から差し引かれなければならないはずなのに、電子書籍の価格はその出版社が出している紙の本の売り上げを損なわない水準に決定されているように見える。そのために上で見たような珍妙な現象が生まれることになる。

#### 【学生たちに古典を安価で提供しよう】

文学といわず社会科学や人文科学の古典も電子化され、買いやすい価格で提供されなければならないと思う。私はアマゾンアメリカ・ネットで電子書籍で買っているが、アダム・スミスの『国富論』は100円、J.S.ミルの『経済学原理』はA.マーシャルの『経済学原理』との合冊本で200円といった具合に、ただ同然の水準で出版されている。このような価格で古典を購入できる英語圏の学生たちは幸運であり、このような恩恵に浴することのないこの国の学生たちは不運である。すでに指摘したように、電子版は精読には適していない。しかし学生がレポートを書くの参照するには十分である。私も参照用と精読用に両方を手元に置いている。

青空文庫にならい、心ある社会学者が結集して社会科学の古典の翻訳と電子化を是非とも実現してほしいものだ。古典を読まない学者や学生たち、これでは基礎的素養が欠けた薄っぺ

らな人材しか生まれない。解決しなければならないのは、「読まない」という状況だけでなく、「読むものがない」「読ませたいものがない」、つまり「手に入らない」という惨状ではないだろうか。

### 【本格的な電子図書館を構築すべきだ】

新聞が報じるところによると、公共図書館が電子書籍貸出を始めるという。実に奇妙な現象といわざるを得ない。なぜ奇妙なのかというと、この国では電子書籍はまだ書籍扱いされていないからだ。公共図書館の頂点にある国立国会図書館は電子書籍はおろかブログやウェブサイトの収集についても明確な方針を打ち出せていない。それなのに、地方の図書館が貸出しを始めるということ自体奇妙なことではないか。

図書館利用者の減少と若者の読書離れを食い止めたいという狙いは理解できないわけではない。しかし現状では、特定の国内企業が提供する端末を購入して貸出すという形をとらざるを得ないのではないか。端末それ自体がそれらの企業から提供されるのかもしれない。書籍も当然のことながらそれらの企業が提供するものになる。将来の電子書籍市場の拡大を見越した国内企業の戦略に組み込まれるだけのことではないのか。

アメリカの議会図書館、ドイツの国立図書館のホームページを覗いてみると、電子化に対応した収集がとつくに始まっているというのに、国会図書館のいわゆるデジタル図書館は紙の蔵書の劣化対策として古い書籍をコピーして提供しているにすぎ

ない。電子書籍を紙の書籍と同等の「書籍」と認定し、ただちに収集を開始すべきではないか。

### 【進んだ韓国に学べ】

『日本経済新聞』2013年10月28日付夕刊記事は、「電子図書館 先を行く韓国」という見出しで、韓国国立中央図書館に併設されているデジタル図書館を紹介している。その規模と活動内容、その理念にはただただ驚くほかはない。

図書館の側が本格的に収集を始めない限り、電子書籍の水準は上がらない。この国はいつたい出版文化の水準低下にどのように対処して遅れを取り戻すのだろうか。書齋で仕事をする私にはその動きはまったくとっていいほど見えてこない。私の机の上のコンピュータがデジタル図書館（ディブラリー）のネットワークに接続され、私の学びが格段に豊かになる日は私の存命中に果たしておとずれるのだろうか。

### 【真の意味での自由で創造的な活動を】

私が電子書籍出版にささやかな一歩を踏み出したのは、以上のような問題の議論をはじめたいためでもあった。はじめに書いたように、私がいまブログやウェブサイトで書いているものは後世に残らなくても一向にかまわないと思っている。ただの一人でもよい、読んでくれたら良いと願っているだけだ。

しかし、この問題を私個人に関わる問題にとどまらせてはならないのだ。電子情報による文化の成果はこのままの水準と状況では後世に残らない。それに引きずられるように、紙の出版

文化も劣化する。それを食い止めなければならない。電子文化  
が作り出す自由が多国籍企業の経営政策や政府の管理強化によ  
ってゆがめられてはならない。真の意味での自由で創造的な活  
動が発展させられなければならない。

### Ⅲ

## 電子的統制による全体主義に 抗して

---

#### 【新しい人権観を構築しよう】

IT 技術は日進月歩、私のような素人が必死に学習を試みても到底理解できない広がりテンポで変化している。このテンポに、この技術によって開かれた文化的秩序が持つべき新しい人権観と公共性についての議論が追いついていないことは明らかだ。本来公共財として展開されるべきものが、あるいは一定の公的規制に包括されるべきものが、技術とネットワークを独占する多国籍企業の販売戦略によって操作され、翻弄されている。そのことがさまざまな歪みもたらし、その矛盾は深刻になるばかりだ。このギャップはできるだけ早く取り戻さなければならぬ。

#### 【倫理の欠落が無制約の管理を生み出す】

利用ルールが確立されないままに発展したため、情報を発信するものが持つべき倫理性の欠落の度合いが深刻になってい



る。個人情報売り渡す事件は後を絶たず、漏洩するはずもない個人情報が関係のない組織の手に渡り利用されている。

最近では、「ビッグデータ」利用の手法の開発が進み、企業の経営戦略の帰趨に無視できない影響を与え始めている。個人情報が許可なく利用されるとプライバシーの侵害、人権侵害として問題視されるが、膨大な個人情報が集積されると、プライバシー問題はすっかり薄められ、無機質の情報集積として大企業の経営戦略に組み込まれる。

ネット書店で書物を買うと書籍購入履歴はたちどころに分析され、おびただしい数の購入勧誘メールが送りつけられてくる。まちの書店で買うなら、私が何を買ったかは記録されることはないから、こういうことは起こりえない。ところがネット通販の場合、その利便性と引き替えに個人情報を素直に提供しているのだ。IT がつくりだす混沌状態のなかで暮らす以上、この程度の個人情報を差し出すことはやむを得ないと判断して利便性の方を選択する。これもよくよく考えてみると恐ろしいことではないか。

IT 管理社会の重要な負の側面であるなどと言ってもらえない問題をはらんでいる。購買履歴やアクセスの情報が集積されると、解析されて、私どもの生活は細部に至るまで掌握されることになる。個人情報は誰のものかなどという議論はどこかに飛んでしまって、巨大計算機に管理される社会にまっしぐらに進んでいる。私が新しい人権についての議論が必要だとする根拠はまさにここにある。

### 【電子化が作り出す無政府性】

ハッカーの跳梁、ウイルス汚染は私のような個人利用者のコンピュータにまで及んでいる。匿名による書き込み、誹謗や中傷の書き込み等の急増は目に余る。それらのトラブルはすべて個人の責任での解決を求められ、場合によってはかなりの経済的支出と時間の浪費をともなう。

国家や大企業も、私企業によって開発され運営されるシステムに依拠して情報を管理し公開する以上、つねにその情報が盗み取られ、破壊されるというリスクを覚悟しなければならない。サイバー攻撃、サイバー戦争という表現をメディアで見ない日はないほど、私どもが知らないところで熾烈な闘いが展開されている。IT 技術に内在する一見すると誰もがアクセスできるという特性が、経済的、社会的無政府状態を生み出しているのだ。

権力による国民の電子的情報管理も、個人情報が出たり破壊されたりするリスクにさらされる。日本の公権力はサイバー攻撃に十分な対応能力を持っているとは考えられないだけに、この危機は現実味を帯びている。

### 【反権力闘争の急伸】

サイバー攻撃や情報の盗み出しは今では、反権力闘争の様相を帯び始めている。J・アサンジが創設したウィキリークスやアノニマス・グループの活動、最近の元 CIA 職員 E・スノーデンのアメリカ諜報活動の実態の暴露等、権力の中枢に関わる

情報がやすやすと進入され、暴露されるという事態が発生している。国家権力が隠蔽したがる情報を、巨大になり営利企業に成り下がったメディアにかわって、「知る権利」をスローガンに若者たちが果敢に情報を暴露して公開する様はある意味で小気味よい。個人や小集団でも権力を揺るがすことができるという状況はかつてない政治文化の大変動ではないだろうか。

これらの活動は権力の側から見れば許しがたい犯罪行為だが、多くの若者によって支持されている。情報発信の自由の実感、この情報発信・アクセスの自由のあり方をめぐる政治的対立の構図をつくり出している。こうした中で、中国における情報統制は言うまでもなく、情報に対する国家統制は強化される傾向にある。これに対抗して、IT 技術に長けた若者を中心にこのような動きに抗してさまざまな政治結社が登場し、ヨーロッパの「海賊党」のように政治文化に一定の地歩を築きつつある。

IT 技術が実現したえも言われぬ平等感覚は、権力による脅しや干渉によって決して消し去られるものではない。海賊党等の活動はこれまでの古典的とも言うべき政治的手法や駆け引き、プロパガンダに比べると稚拙なものにも見えるが、若者たちによるこの活動はもはや止めることは出来ないのではないだろうか。

### 【この国の状況の特異さ】

この国の状況は違っている。若者たちについていえば、スマ

ホという玩具の中毒に冒されて、およそ情報の自由など考えたこともないような雰囲気をつくり出している。もつともこの高級玩具を権力が強制的に取り上げるなどということにでもなれば、だだっ子のように騒ぎ立てるかもしれないが。

知識水準が高さを誇る人たちはというと、IT 技術を嫌悪する流れさえ観察され、これでは管理社会への流れに対抗する主体とは到底なり得ないように思われる。機密保護を名目にした情報管理に対しては「知る権利」をかざすだけではあまり有効な抵抗にはならない。国家による情報管理を打ち破る実践あるのみである。電子技術に対する無知や場合によっては軽蔑の念は払拭されねばならない。

#### 【この状態はグローバル資本主義には好機】

かつて登場した技術のなかでこれほどまでに急速にしかも深部に至るまで社会を捉えた技術はあつただろうか。しかも関連多国籍企業の競争と協調を公的に規制することもなく、スノーデン氏の暴露が明らかにしたように、利用者である大衆の目の届かないところで権力に協力して人権侵害を深刻なものにしている。ある程度は予測できたことではあつたにしても、侵害がこれほどまでに無原則で広範囲に行われているとは。将来社会を危惧する声もつと方々から聞こえてきても良いのではないだろうか。

このような無秩序で無政府的な制度が実現することはグローバル資本主義とその主体である多国籍企業にとっては最大の好

機である。均質な経済社会はその活動を容易にするからだ。これらの企業は今、この制度を巧みに利用して何の抵抗にも遭わずに喜々としてその支配を地球規模に拡大している。

この制度からどのような社会が生まれるのだろうか。電子文化は無条件に人類に豊かさをもたらすものだろうか。イギリスの作家ジョージ・オーウェルが1949年に著した『1984年』で示されたような超管理社会への道を歩み始めるのだろうか。何の抵抗も起こらなければ、その可能性は大きくなっていると言わざるを得ない。

## おわりに

---

私たちは電子化によって手に入れた平等の感性を新たな権利の体系にまで高めていく努力の積み重ねが必要なのではないか。電子情報の発信も電子書籍出版もそのための重要な手段である。文化の領域、ここが最も重要な闘争の場である。そこでは質の高い自由な創造の発展こそが最も有力な闘争手段になる。